

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	石田基起
2. 審査委員	主査：（兵庫教育大学教授） 石倉健二 副主査：（岡山大学教授） 大守伊織 委員：（鳴門教育大学教授） 高橋眞琴 委員：（兵庫教育大学教授） 宇野宏之 委員：（兵庫教育大学教授） 井澤信三
3. 論文題目：超重症児の情動反応に関する生理心理学的研究	
4. 審査結果の要旨 学校教育実践学専攻学校教育臨床連合講座石田基起から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和7年1月26日（日） 14時00分～15時30分 場 所：兵庫教育大学神戸キャンパス講義室2とZoomの併用 1. 学位論文の構成と概要 本研究は、知的障害が重度又は最重度で、運動障害が寝たきり又は座位保持程度であり、視聴覚の障害があり、てんかんや呼吸障害などの合併症を有しているような「超重症児」を対象に、その鼻部皮膚温度の変化から情動反応を評価し、教育的対応のあり方の検討につなげていくことを目的としている。本論文は全6章で構成されている。 「第1章：問題の所在と本研究の目的」では、超重症児に関する国内外の概念や臨床像と教育について整理した上で、超重症児の情動反応評価の動向について概観した。その結果、障害の程度が重度であるほどに生理心理学的指標が用いられる傾向にあり、心拍数が最もよく用いられているものの変動要因が多く信頼性に課題を残しており、他の生理指標の検討が必要であることが述べられた。 「第2章：鼻部皮膚温度測定と分析方法の検討」では、超重症児においても皮膚温度が測定可能であることを検証した上で、測定箇所による温度差と変動要因を明らかにし、環境温度による変化を除いた「情動に伴う皮膚温度変動を取り出す方法」を検討した。その結果、鼻部から額部の皮膚温度を引いた鼻額差分温度が、快・不快状態を捉える指標になる得ることが推察された。 「第3章：鼻部皮膚温度を用いた不快情動評価の探索的検討」では、超重症児2名を対象に鼻部皮膚温度が不快状態評価に活用可能であるか、教育的対応中の鼻部皮膚温度を測定することで探索的に検	

討した。その結果、鼻額差分温度の低下と心拍の加速反応との間で、50%以上の生起一致率が認められ、超重症児の不快情動を引き起こす苦手な刺激を探索する際に活用できることが推察された。

「第4章：鼻部皮膚温度の妥当性と適用可能性の検討」では、超重症児1名を対象に快を促すと想定した働きかけを行い、その時の鼻部皮膚温度と心拍数及び行動面の記録から、教師側の快・不快の解釈の妥当性について検討を行った。その結果、不快情動反応はとらえやすい反応であることが推察されたが、快情動反応は観察や心拍数ではとらえにくい反応であることが推察された。

「第5章：鼻部皮膚温度を用いた教育対応の評価」では、超重症児1名を対象に、指導場面（感覚遊びと光遊び）の鼻部皮膚温度と心拍数を測定し、指導内容の評価と改善に向けた視点を検討した。その結果、当該児童にとっては、光遊びの方が落ち着いた活動であり、快情動を喚起させやすいものである可能性が示唆された。

「第6章：総合考察」では、鼻部皮膚温度による情動反応評価の有用性と留意点を指摘した。その上で、鼻部皮膚温度が超重症児の情動反応を推測する際に有用な方法であることを明らかにし、超重症児の教育対応場面において活用可能な方法であることを考察した。

2. 審査経過

（1）研究の独創性及び発展性

本研究は、実態の把握が極めて困難な超重症児の情動反応について、サーモカメラによる非接触的手法で客観的に測定できる可能性を示した。これはこれまでの重症児研究にはなかった視点と方法であり、独創性が極めて高いものである。そして、より簡便で使いやすい測定方法を検討することで、重症児教育現場での活用も期待できることから、大きな発展性を有している。

（2）学校教育実践への貢献

本研究は、鼻部皮膚温度を測定することで、超重症児への効果的な教育的働きかけについて検証できることを示唆した。これまでは担当教師の主観的な判断を頼りに実施されていた超重症児への働きかけについて、客観的指標に基づく検証を学校現場で実践できる道を拓いた。このことは、超重症児の教育に大きな貢献をしていると言える。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は石田基起の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。